水のさと かながわ「子ども親水啓発事業」

いのちの水 生きている川

～みんなの手で、かながわの水を守り、育て、つなげよう～

このリーフレットでは、県内各地の小・中学校における川や池、水を題材にした学習の実践例を紹介しています。川や池には多くの生き物が生活し、それらは私たちの生活を豊かにするとともに、潤いを与えてくれています。学校や地域での自然の観察や生き物の飼育などを通して、生き物の誕生や成長、生命の大切さについて学んでいきましょう。

ハクセキレイ

タガメ

また、自然の仕組みの素晴らしさを知るとともに、私たちのいのちの源である、水について調べたり限りある水資源を大切に守っていくことについて考えたりしていきましょう。

玉川たんけん

３年生は、「総合的な学習の時間」をつかって、学校の近くを流れる「玉川」について、調べています。月に１度は必ず玉川を訪れ、玉川にすむ植物や生き物を観察したり、天候による川の水の流れ方等を観察したりしています。

２学期は、神奈川県自然保護協会の青砥航次先生他２名の先生方をお招きし、川にすむ生き物について、詳しいお話を聞くことができました。また、玉川を流れる水や石は、大山から流れてきていることや、玉川という名前の由来には、玉川に多く見られる「セラドン石」という、勾玉のもとになる石が関係していること等を教えていただき、３年生にとってとても有意義な時間となりました。

セラドン石

学習の後は、青砥先生から教えていただいたことを、グループ新聞にまとめました。そして、同学年や他学年に発表をする計画を立てました。

サワガニ

３学期は、自分たちの身近にある玉川の美しい姿を保つためには、どのようなことができるかを考えました。

身近な自然に興味を持つだけでなく、守っていくことの大切さにも目を向けることができてきた３年生です。

【厚木市立愛甲小学校】

麻溝の自然博士になろう！

～道保川との関わり・総合的な学習の実践より～

学区には道保川や鳩川など５つもの川が流れていて、子どもたちは日頃から川に親しみをもっています。特に道保川は、都市化が進展する相模原市内にありながらも豊かな自然環境が残されていて貴重な環境資源になっています。３年生の総合的な学習の時間には、道保川を学習対象として様々な体験活動を行っています。

それらの活動を通して、道保川をよりよい川にするために、自分たちでできる具体的な取り組みを実践しています。また、道保川の環境保全に携わる人との交流を通して「きれいな川であり続けてほしい」という願いを共有し、地域への愛着や地域の一員としての自覚を高めながら、道保川を大切にしようとする意欲を育てています。

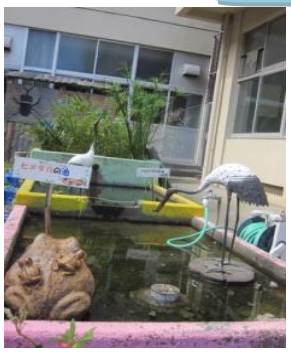
川での自然活動体験の前に、「道保川を愛する会」の方々に、道保川にすむ生き物や道保川の歴史について話をしていただきました。

ドンコ

子どもたちは「道保川を愛する会」の人々の助けを借りて、ドンコやアブラハヤ、カニなどの生き物を捕まえて観察しました。また、道保川に動物だけではなく多くの植物が棲息していることに気がつきました。そこで、道保川に棲息している動植物がすみやすい環境を作るためにはどうすればよいのかを考えていきました。川についての調べ学習をする中で、「たくさんの生き物がすめるようにするために、道保川をもっときれいにしたい」という願いをもつようになりました。今後は、道保川の美化活動や、今までの活動と自分たちの思いをまとめて、お世話になった地域の方や家族に伝える活動を進めていくことになっています。

【相模原市立麻溝小学校】

メダカの泳ぐ池



ビオトープ

ずっと以前から中庭に設置されていたコンクリートで囲まれた池を、ビオトープとして整備することにしたのは一昨年のことでした。それまでこの池は藻が水底まで茂り、とても生き物がすめるような場所ではありませんでした。「子どもたちが間近で生き物を見られる環境にしたい」と考え、平成２２・２３年度に「未来へつながる学校づくり推進事業～地球に優しい行動ができ

る子の育成（環境教育）～」の活動の一環として位置づけて、職員と子どもたちが協力して様々な取り組みを行いました。

その結果、現在は子どもたちの手によりコンクリートがきれいに塗装されて、看板の立てられた場所には酒匂川水系のメダカやヒメダカ、ランチュウが泳ぎ、傍らにはアシやショウブ、イグサ等の水草が生い茂っています。

整備の内容

○水がいつも流れるようにして、酸素を補給する。
○周りに落葉広葉樹を植えたり、ヨシズをかけたりして夏の直射日光が入りにくくする。
○水草を植え、魚のすみかをつくる。
○繁殖しすぎてしまった藻や水草を定期的に取り除き、すみやすい環境を維持する。
○周りのコンクリートをきれいに塗装し、看板を工夫し、鶴やカエルの置物も並べて楽しい雰囲気にする。

ヒメダカ

休み時間になると、子どもたちが水中を覗き込む姿が見られます。また、生活科の学習のおりには、子どもたちが間近にメダカを見ることができ、自然とのかかわりに関心をもつためのよい場となっています。理科の学習や委員会活動でも、子どもたちがメダカの世話をしたり、成長の様子を知ったりすることで、生命を尊重する態度を育てるためのよい環境となっています。

【小田原市立芦子小学校】

水はどこから来るのだろう

ダムの放流

『自分たちが使っている水が、どこで生まれて、どのように運ばれて家庭や学校に届くのか。』という問題を解決するために、宮が瀬ダムや寒川町の浄水場を見学しました。

ダムに蓄えられた水が家庭にとどくまでには長い長い水の旅があることやいろいろな人の協力があることなどがわかってきました。また、浄水場の負担を減らしていくためには、上流の水が汚れていてはいけないことに気づき、上流の水へ意識がさらに広がっていきました。

ダム湖

また、学習を進めていく中で、人が使う水を作るのには、大変な努力が必要であり、大切に使わなければならないことに気づいていきました。自分たちにもできることはないだろうかとみんなで考えたときに、家庭での節水や雨水の再利用など工夫できることがあることがわかり、持ち寄ったアイデアを元に、みんなで実践するようになりました。

【茅ヶ崎市立緑が浜小学校】

多摩川を教材にした環境教育の実践
～とどろき水辺の楽校～

本校は川崎市のほぼ中央に位置しており、北側には多摩川が流れています。平成15年度より総合的な学習の時間（ゼネラルタイム）を使って、「とどろき水辺の楽校」として様々な活動を行っています。その一つとして夏休みを利用して多摩川の源流域にある山梨県小菅村に行き、沢登りを通した源流体験を実施しています。小菅村、丹波山村の水源林は、山梨県にありながらも明治以降、東京都の水源林として管理され、天然のブナを中心とした広葉樹林が広がっています。子どもたちは、小菅村、多摩川源流研究所協力のもと、ライフジャケットにヘルメットという装備を身に付け沢登りを行います。水温12℃前後の冷たい水の中を歩いたり、小さな滝壷に飛び込んだりもします。

沢登り

ニジマスの内臓の処理

この源流体験では、自然への畏敬の念や、源流域を守ることの大切さ、そして川を通してつながっている下流域に住む自分たちの責任などについても学んでいきます。

また、ニジマスのつかみ取りも行います。子どもたちは、現地の人に教わりながら、自分たちで捕まえた魚の頭を石にぶつけ、小刀を使って内臓を処理し串をうちます。こうした体験を通して、自分たちは生き物の命をいただいて生きているという、命とそのつながりについても学んでいきます。

源流体験の後、とどろき付近の多摩川や河口干潟にも足を踏み入れました。そして多摩川について様々な体験を通して感じ・考えたことをまとめ、文化祭で発表していきます。近年水質が急速に改善され、アユが毎年数百万匹も遡上するような川になっているのにもかかわらず、地元を流れる多摩川に入った経験のある子どもは少なく、子どもたちの多くは川崎を流れる多摩川の水について、「くさい」「汚い」などといったイメージを持っていました。体験を通して実感させることで、多摩川の環境を肌身で感じ、川をより大切にしようとする子ども達の意欲の高まりを感じることができました。

渡し舟体験

【川崎市立宮内中学校】

平成26年７月発行　問い合わせ先　神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課
〒231-8509　横浜市中区日本大通33　電話（045）210-1111　（内線）8217